

資料

大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連

富 安 浩 樹¹RELATIONSHIP BETWEEN CAREER DECISION-MAKING
SELF-EFFICACY AND TIME PERSPECTIVE IN UNDERGRADUATES

Hiroki TOMIYASU

This study investigated the relationship between career decision-making self-efficacy and time perspective in undergraduates. 231 undergraduates were administered CDMSE-U : J (Career Decision-Making Self-Efficacy Scale for Undergraduates in Japan), Cottle's Circles Test which measured temporal dominance, temporal development, and temporal relatedness, and a time attitude scale composed of 20 pairs of adjectives to measure image toward personal future. The result showed significant relationship between career decision-making self-efficacy and time perspective, that is, future dominance, future development and temporal integration. Another result showed significant relationship between career decision-making self-efficacy and positive image of future. It might also be added that significant relationship between career decision-making self-efficacy and time perspective, especially perspective toward personal future was obtained.

Key words : career decision-making self-efficacy, time perspective, undergraduates.

問題と目的

Bandura (1977) は、成果を生み出すための行動をどの程度適切に実行できるかどうかの確信度を自己効力と呼んだ。青年期の進路決定においても、進路決定という成果を生み出すための行動をどの程度実行できるかどうかの確信度、すなわち進路決定自己効力が進路決定の重要な一要因であるとして注目されている。そして、進路決定自己効力と進路決定諸行動との間に有意な関連を認める研究が報告されている。たとえば、自己効力の概念を職業選択に適用した Betz & Hackett (1981) は、大学生を対象として、20種の職業の選択に対する自己効力が高いと職業選択の幅が広が

ることを見いだしている。Blustein (1989) は、職業選択自己効力が高いほど進路探索活動が活発に行われることを明らかにしている。浦上 (1994) は、進路選択に対する自己効力 (1992年6月) と実際の就職活動 (1992年10月) についての調査を行った結果、進路選択に対する自己効力と就職先の決定率、就職活動への満足感、就職先への満足感との間に有意な関連を見いだしている。

富安 (1997) は、大学生を対象として、進路決定自己効力が高いほど進路選択行動、自己評価行動、情報収集行動、計画立案行動が活発に行われることを明らかにしている。

ところで、Lewin (1951) は「心理学的過去や未来は、一定時 t に存在する心理学的場の同時的部分であるということを知るのは大切である」と述べている。したがって、ある時点での心理学的事象を検討する場合、その事象と関連する過去や未来も考慮する必要がある。

1 広島大学教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

あると考えられる。また都筑(1993)も、個人の行動の意味を明らかにしようとすれば、過去・現在・未来の力動的な相互作用の中でそれを捉えなければならないとしている。このように人間の心理的事象や行動には、過去—現在—未来の時間的次元が関連していると考えられるが、本研究で取り扱う進路決定自己効力にもこのことがあてはまるであろう。たとえば進路決定に際しては、過去をふり返り、現在を見つめ、将来を予測する心理的過程が存在するが故に、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(Lewin, 1951)、すなわち時間的展望(Time Perspective)をどれだけ持てるかが、有効な進路決定行動の重要な規定因となるであろう。さらに、自己効力が将来の行動遂行の確信度を意味することから考えると、自己効力と将来に対する見通し、つまり未来に対する時間的展望との間に密接な関連があると考えられる。特に、進路決定のための行動は将来の自己像や進路目標との関わりでなされることが多い故に、進路決定に対する自己効力は未来に対する時間的展望と関連が深いであろう。また自己効力は、行動に対する統制感であるとも考えられるが、杉山(1994)は、一般的統制感では未来における成果獲得に対する期待が一般化されたものであるので、個人の未来への時間的展望の形成と密接な関連を持つとしている。

このように、進路決定と自己効力の両者ともに時間的概念が含まれることから考えると、時間的展望特に未来に対する時間的展望を持てれば、将来の進路決定行動の確信度である進路決定自己効力が高くなると考えられる。

さて、進路決定自己効力と時間的展望の関連を直接検討したものはみあたらないが、その関連を示唆する研究は散見される。

加藤(1983)は、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入の希求の観点から、過去、現在、未来の自己のあり方を考慮にいれて同一性地位について検討している。都筑(1993)は、大学生における自我同一性と時間的展望の関連を検討し、(1)自我同一性を達成したものは過去・現在・未来をより統合している、(2)自我同一性地位によって過去・現在・未来の時間的構造の相違が認められる、という仮説を検証している。また、Erikson(1950)は自我同一性の形成において、Marcia(1966)はアイデンティティ地位面接(Ego Identity Status Interview)において、職業が重要な領域であることを指摘していることからすると、加藤(1983)、都筑(1993)の研究は進路意識と時間的展望との関連を示唆してい

るといえる。

Maddux, Sherer & Rogers(1982)は、自己効力と想定した行動において成果を生み出せるかどうかの確信度を意味する結果期待(outcome expectancy)との関連を検討している。林・瀧本(1992)は、一般性セルフ・エフィカシー得点と時間的展望得点との間に関連を見いだしている。また浦上(1993)は、高校3年生を対象として、進路選択に対する自己効力と進路や人生に関する自由記述との関連を検討し、進路選択に対する自己効力の高い者は、進路についての目的意識をはっきりと持っていることを指摘している。さらに浦上(1995)は、女子短期大学生を対象として、進路選択に対する自己効力と将来の進路を決められない職業不決断の間には関連があるとしている。

このような加藤(1983)、都筑(1993)の自我同一性と時間的展望との関連、Maddux, Sherer & Rogers(1982)、浦上(1993)、浦上(1995)の自己効力と将来の目標や行動との関連、林・瀧本(1992)の自己効力と時間的展望との関連の検討、さらには自己効力とは期待された行動を実行できるかどうかの確信度であるということなどから考えると、進路決定自己効力と時間的展望特に未来に対する時間的展望との間には関連があると予想されるので、このことを本研究では検討したい。

本研究では時間的展望を測定する尺度としてCircles Testを用いた。その理由は、進路決定自己効力と時間的展望に関する直接的な研究はみあたらないので、探索的という意味も含めて、Circles Testが時間的展望の3つの側面を1度に測定できる投映的技法(都筑, 1982)だからである。

都筑(1982)は、時間的展望の構造を認知的側面と情緒的側面に分類し、投影的技法は主として認知的側面を研究する技法であることを指摘している。そこで、Circles Testでは測定しがたい情緒的側面である時間イメージについてはSD法によって測定する。

これらのことを考慮し本研究では、Circles TestおよびSD法によって時間的展望を捉え、主として次の2点について検討する。

(1)時間的展望特に未来に対する時間的展望を持てるほど、将来の進路決定行動遂行の確信度である進路決定自己効力は高いであろう。

(2)未来イメージがポジティブであるほど、将来の進路決定行動遂行の確信度である進路決定自己効力が高いであろう。

方 法

調査時期 1994年5月

被験者 大学3年生 231名(男性74名,女性157名)²

質問紙 ①大学生用進路決定自己効力尺度日本語版(Career Decision-Making Self-Efficacy Scale for Undergraduates in Japan)(CDMSE-U:J):この尺度は,富安(1977)が,Taylor & Bets(1983),Crites(1965),中西(1976),竹内・坂柳(1982),および下山(1986)の各尺度を参考に構成したものである。調査項目は,日本の大学生の様々な進路を想定し,卒業前および卒業後の進路決定行動を調査するのに必要だと考えられる合計54項目で,「全く確信できない」(0点)から「完全に確信できる」(9点)までの10件法で回答するようになっている。高得点ほど進路決定自己効力は高い。なお,この尺度は,自分にとって適切な進路を選ぶことができるかどうかの確信度を測定する「進路選択」[「自分にとっての理想の職業を明確にできる」など14項目],進路決定の過程で幅広く有益な情報を収集できるかどうかの確信度を測定する「情報収集」[「興味を持つ職業について,業界情報誌や就職情報誌や役所の広報誌などで情報を入手できる」など15項目],進路を選ぶにあたって自分の適性を明確にできるかどうかの確信度を測定する「自己評価」[「自分の適性について家族や先生や仲間に相談できる」など11項目],希望の進路を実現するために適切な計画を立案できるかどうかの確信度である「計画立案」[「進路の目標を達成するための計画に無理が生じた時には,柔軟に計画を修正することができる」など6項目],進路決定の過程で生じた問題にうまく対処できるかどうかの確信度を測定する「問題解決」[「1度就職した職業が不満ならば,職業を変えることができる」など8項目]の5下位尺度で構成されている。

②Circles Test:Cottle(1967)を参考に都筑(1993)が作成した尺度を使用。教示は文章で「過去,現在,未来がそれぞれ円であらわされていると仮定して,あなた自身の過去,現在,未来の関係について,あなたが感じていることを最もよくあらわすように,3つの円を描いて下さい。描き方は自由です。異なる大きさの円を使っても構いません。描き終わったら,どの円が過去,現在,未来かがわかるように書き入れて下さ

い」と呈示して,教示文の下の方の長方形の枠(縦19.5cm,横14.2cm)の中に3つの円を描くように求めた。

分析の指標としては,都筑(1993)と同様に,時間的優越性,時間的展開性,時間的関連性の3指標をとりあげた。なおCircles Testの3指標に関する日本語訳は,白井(1989)を参考にした。

(A)時間的優越性(Temporal Dominance) これは過去,現在,未来のいずれが優勢であることを示す指標で,どの円が1番大きいかによって,(1)過去優勢(Past Dominance),(2)現在優勢(Present Dominance),(3)未来優勢(Future Dominance),ならびにそれら以外の(4)その他(Others)に分類される。

(B)時間的展開性(Temporal Development) これは時間的展望の時間的展開方向を示す指標である。(1)未来展開(Future Development)は,過去,現在,未来の順で円が大きく描かれているもので,これは,過去よりも現在,さらに現在よりも未来へと意識が広がっている未来指向のことである。(2)過去展開(Past Development)は,過去,現在,未来の順で円が小さく描かれているもので,これは,未来よりも現在,さらに現在よりも過去へと意識が広がっている過去指向のことである。未来展開,過去展開以外を(3)その他(Others)とした。

(C)時間的関連性(Temporal Relatedness) これは過去,現在,未来の統合度を示す指標である。過去と現在,過去と未来,現在と未来のそれぞれにおいて,2つの円が離れている時は0点,2つの円が接している時は2点,2つの円が重なっている時は4点,2つの円のうち1つの円がもう1つの円に含まれている時は6点とした。そして3つの点数を合計して次の3つに分類した。(1)時間的原子(原子と記す場合もある)(Temporal Atomicity)(0点)は,過去と現在と未来がそれぞれ分離していて全くまとまりのない状態。(2)時間的連続(連続と記す場合もある)(Temporal Continuity)(2~6点)は,過去,現在,未来が,つらなりつつある,もしくはつらなっている状態。(3)時間的統合(統合と記す場合もある)(Temporal Integration)(8~18点)は,過去,現在,未来が1つにまとまりつつある,あるいはまとまっている状態。

③時間イメージ尺度:未来イメージを測定するために,勝俣(1972)らの研究を参考に都筑(1993)が作成したものを使用した。これはSD法尺度で20の形容詞対から成り[(例)「暖かい—冷たい」,「明るい—暗い」,「長い—短い」など],7段階(1~7点)で評定させた。得点が高いほどポジティブな未来イメージを持っていることになる。教示文は「あなた自身の未来をイメージした場合,次の各対のどこに最もよくあてはまりま

2 本研究では3つの尺度を用いているが,それぞれの尺度に欠測値が含まれており,分析時の尺度の組合わせによりデータとして使用できる被験者数は異なった。そのために,ここで示した度数は,TABLE 1~TABLE 6の度数とは一致していない。

すか」とした。

結 果

進路決定自己効力得点の分布

進路決定自己効力尺度の下位尺度得点および全体得点について、男性、女性および全体の平均値と標準偏差値をTABLE 1に示した。下位尺度得点および全体得点の平均値について、男女間でt検定を行ったところ有意な差は見られなかった。

Circles Test

Circles Test に関しては、筆者と心理学を専攻する大学院生1名の合計2人で3指標について評定した。一致率は、時間的優勢性では93.1%，時間的展開性では93.5%，時間的関連性では97.0%であり十分に高い一致率を得ることができたので、筆者の評定を最終的な評定とした。

時間的優勢性については、未来優勢が最も多く約71%であった。時間的展開性については、未来展開が最も多く約87%を占めた。時間的関連性に関しては、統合が最も多く約57%だった。時間的優勢性 ($\chi^2=3.0$, $df=2$, n.s.), 時間的展開性 ($\chi^2=2.4$, $df=1$, n.s.), 時間的関連性 ($\chi^2=0.8$, $df=2$, n.s.) の度数分布に関し、男女間でカイ2乗検定を行ったところ有意な差は見られなかった。なお、時間的優勢性、時間的展開性、および時間的関連性についての度数分布は、TABLE 3, TABLE 4, TABLE 5に示した。

時間イメージ尺度

時間イメージ尺度得点について因子分析を行ったところ、第1因子の固有値が第2因子以下の固有値に比べて非常に高いこと（第1因子9.7, 第2因子2.3, 第3因子1.9）、また全20項目のCronbachの α 係数は.87であることから本尺度は1次元の尺度であると判断した。そ

TABLE 1 進路決定自己効力得点の平均と標準偏差

	全体 M(SD)	男性 M(SD)	女性 M(SD)	t 値 df=201
進路選択自己効力	79.4(21.6)	81.8(21.2)	78.3(21.9)	1.1
情報収集自己効力	82.7(20.8)	83.9(18.3)	82.1(21.9)	0.6
自己評価自己効力	70.5(14.8)	70.5(15.8)	70.5(14.3)	0.0
計画立案自己効力	28.7(8.1)	28.7(7.5)	28.6(8.4)	0.1
問題解決自己効力	39.2(12.1)	40.9(11.8)	38.4(12.3)	1.4
進路決定自己効力 (全体)	300.5(67.2)	305.9(64.5)	298.0(68.5)	0.8
度 数	203	65	138	

**p<.01 *p<.05 *p<.10

こで、20項目の形容詞対の得点を合計することで未来イメージ得点とすることにした。未来イメージ得点について、男性、女性および全体のそれぞれの平均値と標準偏差をTABLE 2に示した。未来イメージ得点の平均値について、男女間でt検定を行ったところ有意な差は見られなかった。

進路決定自己効力と Circles Test との関連

前述のように、進路決定自己効力得点および Circles Test の3指標における度数分布に、男女間で有意な差は見られなかったため、男女込みにして分析を行った。

Circles Test の3指標、時間的優勢性、時間的展開性、時間的関連性について、被験者を3群または2群に分け、進路決定自己効力の全体得点と下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出し、分散分析・多重比較（チューキー法）あるいはt検定を5%水準で行った結果をTABLE 3, TABLE 4, TABLE 5に示した。

TABLE 2 未来イメージ得点の平均と標準偏差

	全体 M(SD)	男性 M(SD)	女性 M(SD)	t 値 df=226
未来イメージ	97.2(15.8)	94.5(15.0)	98.6(16.0)	-1.8*
度 数	228	74	154	

**p<.01 *p<.05 *p<.10

TABLE 3 時間的優勢性における各群の進路決定自己効力得点の平均、標準偏差、分散分析、チューキー法による多重比較の結果

(A)優勢性		(1) 過去 優勢	(2) 現在 優勢	(3) 未来 優勢	F 値 df=2/178	多重比較 (5%水準)
進路選択	M	62.5	70.6	83.8	13.4**	(1)<(3)
	SD	26.1	19.2	20.0		(2)<(3)
情報収集	M	68.7	78.1	85.7	7.9**	(1)<(3)
	SD	21.9	16.4	20.6		
自己評価	M	65.0	66.6	72.3	3.5*	
	SD	14.0	12.7	15.5		
計画立案	M	21.6	26.9	29.9	12.4**	(1)<(3)
	SD	7.5	6.1	8.0		(1)<(2)
問題解決	M	30.6	36.5	41.1	9.0**	(1)<(3)
	SD	9.5	9.6	12.4		
全 体	M	248.4	278.7	312.9	11.6**	(1)<(3)
	SD	67.0	51.9	67.1		(2)<(3)
N		24	29	128		

**p<.01 *p<.05 *p<.10

TABLE 4 時間的展開性における各群の進路決定自己効力得点の平均、標準偏差、t 検定の結果

(B)展開性		(1)	(2)	t 値
		未来展開	過去展開	df=110
進路選択	M	84.0	63.7	3.5**
	SD	20.1	23.9	
情報収集	M	86.3	64.7	3.7**
	SD	21.2	21.5	
自己評価	M	72.8	65.7	1.6
	SD	15.8	13.7	
計画立案	M	30.4	22.1	3.6**
	SD	8.4	7.5	
問題解決	M	41.8	31.7	3.0**
	SD	12.7	7.8	
全 体	M	315.2	247.9	3.6**
	SD	69.3	58.3	
N		97	15	

**p<.01 *p<.05 *p<.10

TABLE 5 時間的関連性における各群の進路決定自己効力得点の平均、標準偏差、分散分析、テューキー法による多重比較の結果

(C)関連性		(1)	(2)	(3)	F 値	多重比較
		原子	連続	統合	df=2/197	(5%水準)
進路選択	M	79.6	71.1	82.4	4.2*	(2)<(3)
	SD	22.0	22.5	20.9		
情報収集	M	82.0	77.9	85.0	n.s.	
	SD	22.5	21.5	19.7		
自己評価	M	70.8	67.5	71.4	n.s.	
	SD	14.3	16.6	14.4		
計画立案	M	28.2	25.2	30.2	6.2**	(2)<(3)
	SD	8.8	7.8	7.5		
問題解決	M	37.7	37.1	40.8	n.s.	
	SD	11.4	12.6	12.2		
全 体	M	298.4	278.7	309.8	3.3*	(2)<(3)
	SD	68.1	69.7	65.3		
N		45	41	114		

**p<.01 *p<.05 *p<.10

TABLE 3 に示したように、時間的優勢性に関しては、分散分析の結果、進路決定自己効力の全体得点および「進路選択」「情報収集」「自己評価」「計画立案」「問題解決」の下位尺度得点すべてにおいて 1%ないし 5%水準で有意差が認められた。また多重比較の結果、全体得点については、未来優勢群が過去優勢群と現在

優勢群よりも有意に高く、下位尺度得点については、「自己評価」以外の下位尺度すなわち「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」において、未来優勢群が過去優勢群よりも有意に高かった。このことから、進路決定自己効力が高いことと時間的展望が未来に優勢であることとの間には有意な関連があることがわかった。

TABLE 4 に示したように、時間的展開性に関しては、進路決定自己効力の全体得点および「自己評価」以外の下位尺度すなわち「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」の得点において、未来優勢群が過去優勢群よりも有意に高かった。このことから、進路決定自己効力が高いことと時間的展望が未来へと展開していることとの間には有意な関連があることがわかった。

TABLE 5 に示したように、時間的関連性と進路決定自己効力尺度の全体得点および 5 下位尺度得点の間には曲線的関係が見られた。時間的関連性に関して分散分析を行った結果、進路決定自己効力の全体得点と「進路選択」「計画立案」の下位尺度得点について 1%ないし 5%水準で有意な差が認められた。また多重比較の結果、統合群が連続群よりも有意に高かった。このことから進路決定自己効力、特に「進路選択」「計画立案」の側面の効力感が高いことと過去・現在・未来の統合度が高いことの間には有意な関連があることがわかった。

これらの結果より、仮説 1 は、時間的優勢性、時間的展開性においては支持されたが、時間的関連性においては部分的に支持されるにとどまったといえる。

進路決定自己効力と未来イメージとの関連

前述のように、進路決定自己効力得点と未来イメージ得点の両者とも、男女間で有意な差は見られなかったもので、男女込みにして分析を行った。進路決定自己効力尺度と未来イメージ尺度の間の相関係数を算出した。TABLE 6 に示すように、「進路選択」の下位尺度得点と未来イメージ得点の間の相関は比較的強く、「情報収集」「自己評価」「計画立案」「問題解決」の下位尺度得点と未来イメージ得点の間の相関は弱かった。このことより、未来イメージがポジティブであるほど進路決定自己効力が高いことが示唆された。したがって、仮説 2 はほぼ検証されたといえる。

考 察

以下、進路決定自己効力尺度の全体得点ならびに下位尺度得点と Circles Test の 3 指標の得点ならびに未

TABLE 6 進路決定自己効力得点と未来イメージ得点間の相関係数

	r	N
進路選択	.40**	201
情報収集	.26**	201
自己評価	.29**	201
計画立案	.31**	201
問題解決	.24**	201
全体得点	.35**	201

**p<.01 *p<.05 *p<.10

来イメージ尺度の得点との関連について考察を試みる。

進路決定自己効力尺度の全体得点は、Circles Testの3指標すべてと有意に関連していた。時間的優勢性に関しては、全体得点は未来優勢群、現在優勢群、過去優勢群の順で高く、未来優勢群は現在優勢群と過去優勢群よりも有意に高かった。過去や現在よりも未来がより優勢であるほど、進路決定自己効力は高いといえる。時間的展開性に関しては、未来展開群が過去展開群よりも進路決定自己効力尺度の全体得点は有意に高かった。時間的展望が過去から現在、現在から未来へと展開しているほど、進路決定自己効力は高いといえる。時間的関連性に関しては、統合群が連続群よりも進路決定自己効力尺度の全体得点は有意に高かった。時間的展望において過去、現在、未来が統合されているほど、進路決定自己効力は高いといえる。これらの結果から、時間的展望において未来が最も優勢であると、よく将来を見通せ、時間的展望が過去→現在→未来の方向で展開されていると、未来指向的になり、さらに過去、現在、未来が統合されていると、過去、現在、未来が1つにまとまり、その結果、過去、現在、未来をよく考慮した進路決定行動の具体化が容易になるため、進路決定行動の実行の確信度である進路決定自己効力が高くなったと考えられる。

進路決定自己効力尺度の下位尺度得点とCircles Testの3指標の得点の間にも有意な関連が得られた。時間的優勢性に関しては、「自己評価」以外の下位尺度、すなわち「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」において未来優勢群が過去優勢群よりも下位尺度得点が有意に高く、さらに、「進路選択」においては未来優勢群が現在優勢群よりも、また「計画立案」においては現在優勢群が過去優勢群よりもそれぞれ下位尺度得点が有意に高かった。「自己評価」以外の下位尺度、すなわち「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」はいずれも過去ではなく未来を見つめて行

われる行動であるので、これらの下位尺度の得点は未来優勢群が過去優勢群よりも有意に高くなったものと考えられる。「進路選択」において未来優勢群が現在優勢群よりも下位尺度得点が有意に高かったのは、「進路選択」が現在よりも将来のことを考慮して行われる進路決定行動であることによると思われる。「計画立案」の下位尺度得点が現在優勢群が過去優勢群よりも有意に高かったのは、「計画立案」が現在を考慮して行われる度合いの高い進路決定行動であるからであると思われる。「自己評価」の下位尺度得点に有意に群間差が認められなかったのは、「自己評価」は「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」ほどには未来を見つめて行われる進路決定行動ではないからだと推察される。

時間的展開性に関しても、「自己評価」では未来展開群と過去展開群の下位尺度得点に有意な差は認められなかったが、「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」の下位尺度得点は未来展開群が過去展開群よりも有意に高かった。このことは、「進路選択」「情報収集」「計画立案」「問題解決」の4下位尺度が、過去よりも現在、さらに現在よりも未来へと意識が広がっている未来指向である時、行動の確信度が高まる進路決定行動であるのに対して、「自己評価」の下位尺度は未来指向的でも過去指向的でもない進路決定行動であることを示唆している。

時間的関連性に関しては、「進路選択」と「計画立案」においてのみ統合群が連続群よりも下位尺度得点が有意に高く、「情報収集」「自己評価」「問題解決」においては下位尺度得点の群間差は認められなかった。このことは、「進路選択」と「計画立案」は、「情報収集」ならびに「自己評価」「問題解決」と比較すると、過去、現在、未来を統合的に考慮することをより必要とする進路決定行動であることを示唆している。

なお、進路決定自己効力尺度の全体得点および5下位尺度得点と時間的関連性の間には曲線的関係が見られ、特に、進路決定自己効力尺度の全体得点および「進路選択」「計画立案」の下位尺度得点に関しては、連続群と統合群の間で有意な差が見られ、原子群と統合群の間で有意な差が見られなかった。その理由として、次の2つの可能性が考えられる。第1の理由は、連続群は時間的関連性に対してある程度のまとまりができるが、そのまとまりはあいまいさを残したものであるためかえって不安が高まり、原子群よりも将来の行動に対する確信度が低くなったためと推察される。第2の理由として、Circles Testの関連性の次元の妥当性に問題があるとも考えられる。しかし、これらのこと

は今後の検討課題である。

未来イメージに関しては、進路決定自己効力の全体得点および「進路選択」「情報収集」「自己評価」「計画立案」「問題解決」の5下位尺度得点との相関係数から判断すると、両者の間に関連があることがわかった。これは、未来イメージがポジティブであれば、将来の進路決定行動の確信度が得やすいため進路決定自己効力が高くなり、また、将来の進路決定行動の遂行確信度が高ければ、将来の見通しが肯定的になるため未来イメージがポジティブになることを示唆している。

以上、進路決定自己効力が高いことと、時間的展望において未来が優勢であり（時間的優勢性）、時間的展望が過去から現在へ、現在から未来への方で展開している（時間的展開性）、時間的展望が過去、現在、未来の間に統合がなされていること（時間的関連性）、ならびに時間的展望の中の未来イメージがポジティブに描かれていること（未来イメージ）との間に有意な関連があることがわかった。進路決定自己効力と時間的展望との関連は相互規定的であると考えられ、進路決定自己効力が高く将来の行動に対する確信度が高まると、未来に向けた肯定的な時間的展望が開けてくるし、逆に未来に向けた肯定的な時間的展望が開けてくると進路決定自己効力が高くなると考えられる。しかし、進路決定自己効力と時間的展望は併存的な概念で、また、両者の関連は相互規定的であると考えられるとはいえ、一方の方が他方に対してより強く影響を与えている可能性がある。この問題は今後の検討課題である。

また本研究および今後の研究によって、進路決定自己効力と時間的展望との関連、さらに両者の間の具体的に詳細な規定関係がわかってくると、実際の進路指導において、進路決定自己効力が低く進路決定のための諸行動をうまく遂行できない者に、進路目標の設定や将来の行動の具体化などを通じて時間的展望を持たせ進路決定自己効力を上昇させることや、逆に、進路決定自己効力を上昇させ進路目標の設定など未来に対する時間的展望を持たせる具体策を立てるための示唆を得ることができよう。進路指導における本研究の意義はここにあると考える。

最後に、本研究の調査対象者は進路決定をかなり意識しはじめる大学3年生であるが、進路決定までには十分な時間のある大学1年生時から進路決定に迫られている4年生までの間には、進路決定自己効力、時間的展望および両者の関連は変容していく可能性がある。そこで今後は、学年が進むにつれて、進路決定自己効力、時間的展望および両者の関連はいかに変容してい

くのか検討する必要がある。

引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191—215.
- Betz, N.E., & Hackett, G. 1981 The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 399—410.
- Blustein, D.L. 1989 The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process. *Journal of Vocational Behavior*, 35, 194—203.
- Cottle, T.J. 1967 The circles test : An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 31, 58—71.
- クライツ J.O. 道脇正夫（訳） 1972 職業的発達概念と測定 職業研究所（Crites, J.O. 1965 Measurement of vocational maturity in adolescence. *Psychological Monographs*, 79.）
- エリクソン E.H. 仁科弥生（訳） 1977 幼児期と社会1 みすず書房（Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. New York : W.W. Norton & Company.）
- 林 潔・瀧本孝雄 1992 問題解決行動と self-efficacy, および時間的展望との関連について 白梅学園短期大学紀要, 28, 51—57.
- 勝俣暎史 1972 人生における時間場認知に関する研究(2) 日本心理学会第36回大会発表論文集, 398—399.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292—302.
- レヴィン K. 猪股佐登留（訳） 1956 社会科学における場の理論 誠信書房（Lewin, K. 1951 *Field theory and social science*. New York : Harper）
- Maddux, J.E., Sherer, M., & Rogers, R.W. 1982 Self-efficacy expectancy and outcome expectancy : Their relationship and their effects on behavioral intention. *Cognitive Therapy and Research*, 6, 207—211.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of

- ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551—558.
- 中西信男 1976 進路発達検査 (CDT-2) の研究 大阪大学人間科学部紀要, **2**, 113—160.
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, **12**, 73—82.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20—30.
- 白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造(2) 大阪教育大学紀要第IV部門, **38**, 183—196.
- 杉山 成 1994 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, **42**, 415—420.
- 竹内登規夫・坂柳恒夫 1982 進路成熟態度尺度 (CMAS-1) の作成と項目分析 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **32**, 193—210.
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63—81.
- 都筑 学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73—86.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40—48.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究, **8**, 15—25.
- 浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力と進路計画性・積極性との関連 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 519.
- 浦上昌則 1994 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究 青年心理学研究, **6**, 40—49.
- 浦上昌則 1995 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断 進路指導研究, **16**, 40—45.

付 記

1. 本論文は、1995年広島大学大学院教育学研究科修士論文として提出したものを、加筆、修正したものである。
2. 本論文を作成するにあたり、心暖かなご指導を頂きました広島大学教授今泉信人先生に感謝申し上げます。

(1996.5.2 受稿, '97.3.25 受理)